

王、カリフもしくはスルタン

—1920年、シリアはなぜ王政を選んだのか？

アブドゥール・カリム・ラフェク

ウィリアム・アンド・メアリー大学

序論

王政は、中東で最古の政治体制である。「マリク (malik)」という称号には、セム系言語に様々なバリエーションが存在する。これはユダヤ・キリスト教世界において、支配者を表す言葉として長く用いられてきたものである。王政はその長い歴史の中で、支持と拒絶を幾度となく経験してきた。そして王位は聖俗両方と結びつき、力の大小にかかわらず、世俗的支配者が、いや強大な権力を誇る女性支配者までもがそれを求めてきたのである。

マリクという称号は、すでに紀元328年にアラブ世界に登場していた。アラブの詩人、イムルーアルカイスの墓がナマラにあるのだが、その碑文の中で、彼はアラブの王と称されているのだ。イムルーアルカイスは、メッカのカーバに掲げられていた7つの長詩カシードの一つ、ムアーラカート (mu'allaqat) の作者である。彼の出身部族、キンダは、短命に終わったが、王国を築いたこともある。しかし、アラビアの部族の間に王政が根付くことはなかった。

イスラム教においては、王の称号に相応しい存在は神だけとされ、自らを王と呼ぶ者は暴君として非難された。アラブのイスラム教徒は、王という言葉、基本的にはイスラム教徒以外の支配者を呼ぶ際に限って使った。アラブのイスラム教徒支配者を王と呼ぶこともあったが、それは皮肉としてであり、彼らをイスラム教徒として認めていないことを示すものだった。しかし非アラブ人イスラム教徒の支配者、そしてごく一部のアラブ人イスラム教徒支配者も、王という称号を名乗って権力を誇示し、自分たちより力の弱いカリフに対する優位を主張することがあった¹。

その後イスラム教では、マリクという称号を、アラブ人か否かにかかわらず、強大な力を持つイスラム教徒支配者に対して使うようになった。たとえば、マムルーク朝およびオスマン帝国時代、シリアの年代史家や伝記作家は、イスラム教徒支配者に言及する際、マリクという称号を単独で、またはスルタンやシャーの称号と組み合わせて使った。かくして、オスマン朝のスルタンは、マリク・アルラムと呼ばれるようになった。「ラム」は元々「ギリシャ人」を意味する言葉だったが、やがてアラブ人イスラム教徒がビザンティン帝国の人々を指して使うようになり、その後、ビザンティン帝国の後を受け継いだオスマン朝の人々にも適用されるようになったものである。同様に、マムルーク朝のスルタンは、アルスルタン・アルマリク、もしくはアルマリク・アルスルタンと呼ばれ、シャファヴィー・シャー (Shafavid Shah) はマリク・シャーと呼ばれた²。これらの支配者が自らマリクを名乗ったわけではないが、地元の作家が、単なる称号としてではなく、尊敬の念を込めて、彼らをそう呼んだのだ。この言葉はそのまま廃れることなく使われ続け、やがて20世紀初頭には、アラブ諸国において正式な称

号となった。

かたやカリフという称号は、もともとイスラム教と深く結びついた言葉である。当初は、イスラム社会の最高権威者（アミール・アルムーミニーン／*amir al-mu'minin*）としても知られる、預言者ムハَمَّد（モハメット）の後継者（ハリーファ／*khalifa*）に対して用いられた。カリフは、イスラム教のイマーム（「礼拝の指導者」の意味）を務めながら、イスラム教を広め、その規律を執行する役割を担っていた。最初のカリフは、紀元632年から661年の間の、正統カリフ（ラーシドゥーン・カリフ（*Rashidun Caliphs*）／「正しく導かれし者たち」の意味）の時代に、イスラム社会の長老によって選ばれた。カリフとその制度は、ウマイヤ朝、アッバース朝およびファーティマー朝、ならびに短期間ではあったが、オスマン朝といった支配王朝で用いられた。アラブにおけるカリフの制度は、1258年、アッバース朝がモンゴル人によって滅ぼされたときに消滅した。その際、アッバース朝のカリフはマムルーク朝の首都カイロに逃れ、政治的権力を失ったまま余生を送る。このような状況は、アッバース朝の最後の後継者である、第55代カリフ、アルムタワッキル・アラー・アッラーフ・ムハンマド・ヤークーブ（*al-Mutawwakil'ala Allah Muhammad Ya'qub*）が、イスラム暦957年8月12日（西暦1550年8月26日）に亡くなるまで続いた³。

1517年にオスマン朝がカイロを占領すると、アッバース朝のカリフは、マムルーク・スルタン・カーイトバイ（*Mamluk Sultan Qayitbay*）と対立するスルタン・セリムⅠの側についたと言われている⁴。18世紀からの言い伝えによれば、「アッバース朝カリフ、アルムタワッキル（*Abbasid Caliph al-Mutawakkil*）は、イスタンブールのアヤソフィアのモスクで行われた式典で、スルタン・セリムとその後継者に、カリフの位を正式に移譲した」とされている。ただし、ハリル・イナルジク（*Khalil Inalcik*）は、現在残っている記録にこの言い伝えを裏付ける証拠は存在しないと言う⁵。いずれにせよ、スレイマンⅠ世（大帝）の時代（1520-1566）に、オスマン朝のスルタンはムハンマドの属していたクライシュ族の流れを汲む者ではないため、イマームおよびカリフの称号を名乗ることは許されないのではないか、という疑問が浮上した。これに対しイナルジクは、スルタンはイスラム世界における事実上の主権者として、カリフを名乗ることができると述べる⁶。事実、オスマン朝が国の正式な学校として認定したハナーフィ法律学校は、カリフはクライシュの子孫に限られるとは言っていない。

イナルジクによれば、18世紀になってオスマン朝の権威が衰え始めると、スルタンは、アッバース朝が権威を誇示するために利用したカリフの理論的概念に頼るようになったという。例えば1727年のサファヴィー朝との条約、および1774年のロシアとのキュチュク・カイナルジャ条約を締結した際に、そうした姿勢が見られたとのことだ⁷。スルタン・アブデュル・ハミトⅡ（*Sultan Abdul-hamid II*）（1876-1909）は、オスマン朝のスルタンとして初めて、正式に、かつ公然とカリフを名乗り、汎イスラム主義者に対して、イスラムのリベラル勢力と戦い、イスラム教徒を支配するヨーロッパ諸国の脅威になろうと呼びかけた。

シリア征服後、オスマン朝は、カディムもしくはハーミー・アルハラマイン・アルシャリーファイン（*Khadim or Hami al-Haramayn al-Sharifayn*）（「2つの神聖なる場所の従者または保護者」の意味）というイスラムの称号を用いるようになった。これは、イスラム暦922年

8月（西暦1516年9月3日）にアレppo⁸で行われた金曜日の礼拝において、演説者（カティーブ／khatib）がスルタン・セリム I（Slutan Selim I）に与えたものである。この名誉ある称号がスルタンに与えられたのは、ヒジャーズへの巡礼に便宜を図ってほしいとの思惑からだった。実際、この称号はオスマン朝の勅令（カヌーン名）8の前文に登場している。皮肉なのは、このように重みのある称号をもらい受けながら、オスマン朝のスルタンは誰ひとり巡礼に出かけなかったということである⁹。

オスマン朝の支配者は、つねにスルタンの称号を名乗った。スルタンというアラビア語は権威を意味し、最初はアッバース朝のカリフがバグダッドの事実上の支配者、セルジューク族（およそ1050-1150）に与えたものである。その後、カリフの中にも、権威と権力を誇示するためにスルタンを名乗るものが現れた。時にスルタンという称号はマリクの称号と組み合わせられ、スンニ、シーア両派の指導者によって使われた¹⁰。

20世紀初頭の支配者の称号

1909年、青年トルコ党により結成された統一進歩委員会（CUP）がスルタン・アブデュル・ハミト II を退位に追い込んだが、その後もオスマン王朝は権力を維持し、オスマン朝のスルタンは、スルタンの称号だけでなく、カリフの称号も名乗り続けた。ダマスカスとメディナの間にヒジャーズ鉄道（1901-1909）を敷いたスルタン・アブデュル・ハミト II は、「2つの聖都（Two Holy Sanctuaries）」の従者、そしてカリフとしての地位を確固たるものとしていた。この鉄道建設の表向きの目的は、ヒジャーズ巡礼に便宜を図ることであったが、この鉄道の完成によって、第一次世界大戦中のヒジャーズへのトルコおよびドイツ軍の物資輸送が容易となり、結果として両国は、紅海におけるイギリスの利益を脅かしたのである。これに対してイギリスは、ヒジャーズ王、シャリフ・フサイン（Sharif Husayn）に対して、オスマン朝に叛旗を翻し、ヒジャーズ鉄道を破壊するよう説得した。イギリスは王に対し、シリア、イラクおよびアラビアの独立を認め、カリフの称号の下、彼をこれら3国の支配者にすると約束した。シャリフ・フサインは1916年6月10日に反乱を起こした。イギリスからの支援と、T.E.ローレンス（アラビアのローレンス）からの助言を受け、シャリフ・フサインの息子、アミール・ファイサル（Amir Faysal）と、ベドウィンで構成された軍隊は、ヒジャーズ鉄道を破壊した。ベドウィンがヒジャーズ鉄道の破壊に協力したのは、ヒジャーズへの巡礼者輸送をめぐる、この鉄道が競争相手となるからであった。

第一次世界大戦でオスマン朝が敗れると、同国の将校、ムスタファ・ケマル（Mustafa Kemal）は、トルコを占領していたヨーロッパ列強との条約締結に成功した。彼は、1922年11月1日にスルタンを、さらに1924年3月8日にはカリフを廃止してトルコ共和国を建国し、自らが大統領となった。ここに、オスマン朝は終わりを告げたのである。

イギリスにカリフの地位を約束されていたシャリフ・フサインは、トルコでのカリフの廃止に乗り、自らをカリフと宣言した。この行為は、ライバルのアブデュル・アジズ・イビン・サウド（Abd al-‘Aziz ibn Sa’ud）というナジュドのスルタンを激怒させた。イビン・サウドは、忠誠心の強いイフワーン軍を率いて、1925年にヒジャーズを占領し、シャリフ・フサイ

ンを追放した。この結果、イビン・サウドは、ナジュドのスルタンだけでなく、ヒジャーズの王にもなったのである。1932年、彼はサウジ・アラビア王国を建国する。自らの宗教上の威光を誇示するために、彼はその後、様々な称号に加えて、カディム・アルハラマイン・アルシャリファイン (Khadim al-Haramayn al-Sharifayn) (「2つの聖都の守護神」の意味) を名乗る。

当時、カリフについては、綿密な再評価が行われていた。シリアの学者、ムハンマド・ラシード・リダー (Muhammad Rashid Rida) (1865-1935) はカイロに住み、エジプトのムフティーであるアザール・ムハンマド・アブドゥフ (Azhar Muhammad 'Abduh) (1849-1905) の弟子として広く知られていた。彼は、自らが定期的に発行する「マナール (*al-Manar*)」誌で、イスラムの近代化と改革を訴えた。そしてカリフの復活、およびサラフ (先祖) の頃の純粋なイスラム教への回帰を主張した (サラフ主義)。彼がワッハーブ派、つまり極めて優れたサラフ主義者を賞賛していたのはこのためである。リダーは、当時、アラブ民族主義とカリフへの忠誠との間に緊張関係が存在していることを知っていた。彼はトルコに対してアラブを擁護し、オスマン朝が権力を失った今こそ、アラブ人がカリフを取り戻すべきだと主張した。さらに彼は、アラブ人とトルコ人の和解を図ろうとした。しかしながら、ヨーロッパの保護を受けたアラブ人カリフは認めず、その理由から、シャリフ・フサインがカリフを名乗ることには反対したのである¹¹。一方アザール・ムハンマド・アブドゥフの弟子、アリー・アブダル・ラッザーク (Ali 'Abd al-Razzaq) (1888-1966) は、自らの著書、*al-Islam wa-Usul al-Hukm* (イスラムおよび政治的権威の基盤) の中で、カリフという地位は本来神聖なものではないため、復活させるべきではないと主張した。この主張は激しい議論を呼んだ¹²。

スルタンという称号は、オスマン朝の支配者が何世紀にもわたって名乗ったものだが、20世紀初頭になると、ナジャドのスルタン、イビン・サウド (Ibn Sa'ud) やオマーンのスルタンを始めとするアラブの支配者も名乗るようになった。1914年、イギリスが、ドイツの側についたオスマン朝への報復措置として、エジプトに対する同国の宗主権を剥奪し、エジプトを自国の保護国とした時、彼らはエジプトの支配者の称号を、オスマン朝のスルタンが1867年にイスマイルに与えたヘティブ (*khedive*) (ペルシャ語で「王」の意味) から、スルタンへと変更した。しかし1922年、イギリスはエジプトに対し、条約関係に基づく形式的な独立を認め、その際、エジプトの支配者の称号をスルタンから王へと変えたのだった。

1920年3月8日、ファイサルがシリア王を宣言する

1916年6月10日にアラブ民族主義者による反乱が勃発し、ヒジャーズ鉄道が破壊された後、アミール・ファイサルはシリアを目指して北へ向かった。彼は、パレスチナから進んできたアレンビー (Allenby) 司令官率いるイギリス軍と合流し、1918年10月4日にはダマスクスへ入城した。当時、フランスはバイルートを占領し、1916年5月16日のサイクス＝ピコ協定を実行するために、シリア沿岸を北上していた。シャリフ・フサインの代わりを務める息子のファイサル、およびイギリスを代表する軍政長官の下に置かれたアラブ政府が、ダマスクスで設立された。その支配権は、北はアレッポおよびデイル・アズール (Dayr al-Zur) にまで達す

るシリアを含む東部地帯に及んだ。イギリスが任命した軍政長官は、ダマスカスの名士、リダー・パシャ・アルリカービー (Rida Pasha al-Rikabi) であった。

ファイサルとアルリカビの両者が支配権を握るという二元構造は、ダマスカスのアラブ政府にとって足かせとなった。9月15日、イギリスはフランスとの間で条約を締結した。それに基づいて、イギリスはシリアから撤退し、代わりにフランスがシリアに入ることとなり、イギリスを代表する軍政長官の職は廃止された。ファイサルとアラブ政府は、フランスおよび国内のオスマン支持派の名士の抵抗に直面した。名士とは、大地主や宗教学者(ウラマー／the ‘ulama) のことで、彼らは民族主義に反対していた。

1917年4月にドイツに宣戦布告を行い、パリ和平会議に出席したウィルソン大統領によって、キング・クレーン委員会 (King-Crane Commission) として知られるアメリカの調査委員会がシリアに派遣された。1919年の6月から7月にかけてのことである。この委員会は、民族自決権に関するシリア人の希望を確認するためのものであった。イギリスとフランスはこの委員会をボイコットした。委員会は、シリアの団結は強く、同国の分割は容認できないと結論づけた。さらに、統一されたシリア国家にパレスチナを含めるよう勧告し、パレスチナへのユダヤ人移住というシオニズムの計画を民族自決権の侵害と見なした。委員会の勧告は、英仏両国から無視されたまま、1922年に公表されるまで棚上げにされた。その当時、すでにアメリカは国際連盟を脱退していた。

1919年に選挙で選ばれたシリア全体会議 (al-Mu’tamar al-Suri al-‘am) は、和平会議において英仏両国による陰謀を知り、1920年3月8日に会合を開くと、立憲君主制国家シリア (レバノンおよびパレスチナを含む) の独立を宣言し、ファイサルを国王とする旨の決議を採択した。同会議はさらに、シリアとイラクの経済的統合を求めた。イスラム教徒議員の過半数に加えてキリスト教徒およびユダヤ人を含む民族主義者は、以前に比べて現実的になっており、シリア、イラクおよびヒジャーズから成るアラブ独立国家建設という夢については実現をあきらめていたのだ。しかしシリア全体会議 (al-Mu’tamar al-Suri al-‘am) は、なぜカリフやスルタンの制度ではなく、王政を選択したのだろうか。

当初ファイサルは、シリア、イラクおよびヒジャーズから成るアラブ王国を建国し、父を最高位にすえ、自らはシリアを担当しようと考えていた。ダマスカス商業裁判所 (the Commercial Tribunal in Damscus/al-Mahkama al-Tijayya) の記録によれば、イスラム暦1337年1月1日 (西暦1918年10月7日) にアラブ国家 (al-Dawla al-‘Arabiyya) の建国が正式に宣言された。ファイサルがダマスカスに到着してから3日後のことである¹³。さらに同裁判所は、アラブ王、フサイン I (Malik al-‘Arab Husayn al-Awwal) の名において判決を下すようになった。さらにフサインに対し、アラブの王およびイスラム教徒のカリフ、もしくはアラブのスルタンおよびイスラム教のカリフという称号も与えた¹⁴。ダマスカスのイスラム教裁判所 (al-Mahkama al-Shar’iyya) は、シリア市民は信条に関係なく、アラブ・シリア国家 (min tib’at al-Dawla al-‘Arabiyya al-Suriyya) に属すると明言した。同裁判所の記録文書においては、アラブ・シリア国家という名称に、伝統的にオスマン朝だけが使用していた、al-‘aliyya (「高貴な」の意味) という形容詞が付け加えられることもあった¹⁵。ダマ

スクスのイスラム裁判所は、裁判記録の見出しに、トルコ語ではなくアラビア語を使用するようになり、イスラム暦1337年1月19日（西暦1918年10月25日）に判例の一覧表を新たに作成し始めた。これは、1920年12月30日まで続いた。1920年7月24日、フランスはダマスクスを占領した。さらに1921年1月3日、フランスは、新たにアラビア語による裁判記録目録の作成を開始した¹⁶。

アラブ民族国家におけるインフラストラクチャの整備の必要性を感じたファイサルは、1918年10月6日、立法機関として、諮問評議会（Majlis al-Shura）を設立した。同評議会の評議員の3分の1はキリスト教信者で、このことは、ファイサルの寛容な政策の表れでもあり、キリスト教信者の行政能力を示すものでもある。シリア社会の多元的性質、アラブの民族主義運動（al-Nahda al-'Arabiyya）にキリスト教信者が果たす大きな役割、および政教分離国家であることをヨーロッパに印象づける必要性から、ファイサルは、宗教に対する寛容な態度を、自らの政策の柱に据えたのだった。トルコでの虐殺を逃れたアルメニア難民が、彼らによって自らの経済的利益が脅かされると感じたアレppoのイスラム教徒から嫌がらせを受けると、ファイサルは1919年6月にアレppoまで出向き、アラブ・クラブ（al-Nadi al-'Arabi）で講演を行った。彼はそこで寛容の精神の必要性を説き、次のように語った。「私に言わせれば、我々には多数派も少数派も存在しない。我々を分かつものは何もない。我々は一つなのだ。宗教も宗派も存在しないことは、暫定政府の活動が証明している。なぜなら、我々は、モーゼ、ムハンマド、キリスト、そしてアブラハムが現れる前からアラブ人だったのだから。我々アラブ人は生涯共にあり、死が我々を分かつにすぎない。我々が分かれたれるのは、土に帰る時だけなのだ」¹⁷。

すべての国民を信条に関係なく結びつける基盤としてのアラブ主義を強調することで、ファイサルは政教分離国家の基盤を確立した。この政策がもとで、ファイサルはイスラム教保守主義者の不興を買うことになる。しかし、多くのキリスト教信者から成る民族主義者からは、尊敬と支持を得ることができたのである。（ファイサルは、1921年から1933年に亡くなるまでイラク国王の地位にあったが、その間、宗教上および民族上の少数派に対しても、寛容政策を採った）。それにもかかわらず彼は、シリアの宗教学者（ウラマー）からの支持を得ようとして、彼らを政府の要職に就けた。また、大多数の人々に益する経済的規制を実施した。ファイサルの命令に基づき、諮問評議会は、軍事費を調達するための特別税を課していた法律（Qanun Wirku al-Harb）、ならびにイスラム暦1130年度（西暦1911年・1912年）予算の不足分を補うためのオスマン法（Qanun Sadd 'Ajz Mizaniyyat 1330）を、1918年11月3日に廃止した。

シリアでのファイサルの人気は高まり、彼はシリア国王に選出された。彼を国王に選んだシリア全体会議は、トリポリの代表であるムハンマド・ラシッド・リダ（Muhammad Rashid Rida）の指揮の下、1919年6月3日に初めて召集され、ハーシム・アタッシ（Hashim Atassi）というホムス代表を議長に選出した。1920年3月に会議を召集したファイサルの目的とは、シリアでの自らの地位を合法化し、国王として選出されるための道を開くことだった。当時、アラブの広範囲におよぶ統一という構想は、実現不可能と思われた。

会議には2つのグループが生まれていた。ファイサルを支持する民族主義者のグループと、

彼に反対する保守主義者のグループである。民族主義者はさらに、過激派と穏健派に分かれた。過激派は、ファイサルが主張するシリア統一および独立を、アラブの統一を目指す政策からの逸脱と受け取った。さらに彼らは、彼の姿勢を、少数派に配慮し過ぎであるとして批判した。一方で、中立派 (Hiyadiyun) と言われた穏健派は、彼の政策を支持した¹⁸。またファイサルに反対する保守派は、「伝統的名士」(Old Notables/al-Dhawat al-Qudama) として知られていた。彼らはブルジョア封建主義一族を始めとする貴族であった。彼らは、ファイサルと民族主義者を、フランスと対立し、彼らの利益を阻害し、結果としてシリアの政情を不安定にする脅威とみなした。彼らの中にはフランス支持を表明する者もいれば、宗教学者 (ウラマー) やスーフィー教徒 (tariqas) を含め、フランスの支配を受け入れる意思を示す者もいた¹⁹。

ファイサルの支持者は、幅広い階層から成る人民戦線 (al-Jabha al-Sha'biyya) を組織し、会議を支配した。彼らはまた、アラブ・クラブ (Arab Club)、進歩党 (the Progressive Party) (Hizb al-Taquddum)、およびシリア愛国党 (the Patriotic Syrian Party) (al-Hizb al-Watani al-Suri) といった主だった組織にも名を連ねた。彼らにとって、シリアの統一は、より大規模な、アラブ統一に向けての足がかりだったのである²⁰。

穏健派と保守派に分裂したものの、会議は全会一致でファイサルをシリア国王に選出した。会議に参加した7名のキリスト教司教とダマスクスのユダヤ教ラビ長は、ファイサル国王を支持するという誓約を書面で明らかにした。その理由は、ファイサルがすべての宗教を尊重し、法の下での平等と法の遵守を約束したからである。この誓約は、アル・アーシマ (al-'Asima) (首都の意) という官報で発表された²¹。

1920年3月8日、シリア第二の都市アレッポでは、当局が次のような宣言を載せたチラシを配布した。

「たとえ信念に背くとしても、イスラム教徒はキリスト教徒およびユダヤ教徒の兄弟である」

「アラブ人は、モーゼおよびキリストおよびムハンマドの前にアラブ人である」

「自由と独立は、シリアの2つの権利である」

「独立とファイサルは、シリアの2つの宝である」

「シリア人の血は、独立のために流される」

「シリアは、自由を手にするに最もふさわしい国家である」

「宗教は神のものであり、祖国は神の子のものである」

アレッポのアメリカ領事は、1920年3月13日付の本国への電信で、このチラシについて報告した際、ファイサルが国王に選ばれるだろうと述べた。彼の言葉によれば、「現地当局は、正式な発表を行っていないが、どうやらアミール・ファイサルは、メソポタミアおよびパレスチナを含む、『シリアの国王』に指名されたい²²。メソポタミア (イラク) が含まれるという点は、アラブ民族主義者の希望的観測であって、実際には実現しなかった。

イスラム教とキリスト教の相互理解を図る目的で、アレッポで設立されたアラブ同胞委員会 (the Committee of Arabian Brotherhood) の代表団は、ファイサルが正式に国王として選出される1週間前の3月13日の朝、ダマスクスに向けて出発した。アレッポを代表して、彼にお祝いを言うためであった。代表団は、4名の著名なイスラム教信者と6名のキリスト教信

者で、うち3名は司教であった。アレppoのユダヤ人名士と大ラビ (the Grand Rabbi) 1名ずつは、同じ目的のため、すでに一日前に出発していた²³。こうして、平等と宗教の自由が保障されるはずの君主制に対する期待は高まっていたのだった。

当時のシリアにおけるアラブ民族意識の高まり、宗教に対するファイサルの寛容な政策、行政へのキリスト教徒の参加、およびヨーロッパ的な立憲君主国の建国をヨーロッパに印象づけたという思惑を考えると、王政は、シリアという新興国家に最もふさわしい制度だったと言える。しかし、ファイサルを国王として発足したこのアラブ国家は、わずか4ヶ月しかもたなかった。1920年7月25日、同国は、ダマスカスを占領したフランスに屈したのである。この占領は、イギリスとフランスが締結した、1920年4月25日のサンレモ協定に基づくものであった。この協定により、フランスは、シリアおよびレバノンの占領を認められていたのである。サンレモ協定は、独立シリアの国王としてファイサルが選ばれたことへの対抗措置であった。

シリアにおけるファイサル国王のアラブ政府が遺した遺産は、民族国家の成立に不可欠な制度と組織の整備、宗教的寛容の精神、そして国家のアラブ化であった²⁴。

注

- 1 Bernard Lewis, *The Middle East: A Brief History of the Last 2,000 Years* (New York: Simon & Schuster, 1995), pp.140-1; Marshall G.S. Hodgson, *The Venture of Islam, The Classical Age*, vol. 1 (Chicago: The Chicago University Press, 1974), pp. 459-60; *The Encyclopedia of Islam*, New Edition, article *Malik*.
- 2 Najm al-Din al-Ghazzi, *al-Kawakib al-Sa'ira bi-A'yan al-Mi'a al-'Ashira*, Jibra'il Jabbur編 (Beirut: Dar al-Afaq al-Jadida, 1979), pp. 294-5.
- 3 Muhammad Ibn Abi'l-Surur al-Bakri al-Siddiqi, '*Uyun al-Akhbar wa-Nuzhat al-Absar*, ms., no. 77, Cairo, Dar al-Kutub al-Misriyya, fols., 138b-139a; Abdul-Karim Rafeq, *al-'Arab wa'l-'Uthmaniyyun, 1516-1916*, 2nd edition (Damascus: Atlas, 1993), p.4.
- 4 Muhammad ibn Iyas, *Bada'i' al-Zuhur fi Waqa'i' al-Duhur*, vol. 5, edited by Muhammad Musatfa (Cairo: 'Issa al-Babi al-Halabi, 1961), pp.166-7; Rafeq, *al-'Arab*, p.63.
- 5 Khalil Inalcik, "Appendix: The Ottomans and the Caliphate," *The Cambridge History of Islam*, 2 vols. (Cambridge: Cambridge University Press, 1970), see vol. 1, p.320.
- 6 Ibid., pp.322-3.
- 7 Ibid., pp.320-3; Khalil Inalcik, "Islamic Caliphate, Turkey and Muslims in India," in *Shari'ah, Ummah and Khilafah*, edited by Yusuf Abbas Hashimi (Karachi: Fazlee sons Limited, 1987), pp.17-20; Stanford J. Shaw, *History of the Ottoman Empire and Modern Turkey*, 2 vols. (Cambridge: Cambridge University Press, 1976-7), vol. 1, p.250; *Encyclopedia of Islam*, New Edition, article *Khalifa*, pp.945-6.
- 8 Inalcik, "Islamic Caliphate," p.18
- 9 Suraiya Faroghi, *Pilgrims and Sultans, the Hajj under the Ottomans, 1517-1683* (London: I.B. Taurus, 1994), p.185.
- 10 *Encyclopedia of Islam*, New Edition, article *Malik*, pp.261-2
- 11 カリフに関するRashid Ridaの見解についての、包括的で洞察に満ちた議論については、Mahmoud Haddad, "Arab Religious Nationalism in the Colonial Era: Rereading Rashid Rida's Ideas on the Caliphate," *Journal of the American Oriental Society*, 117.2 (1997), pp. 253-277.を参照のこと。
- 12 Albert Hourani, *A History of the Arab Peoples* (Cambridge: Harvard University Press, 1991), pp.346-7.

- 13 Directorate of Historical Archives, Damascus, al-Mahkama al-Tijariyya, vol. 149.
- 14 Ibid., vol. pp.145,156.
- 15 具体的には、Damascus, Shari'a Court Records, vol.1533, p.89, vol.1544, p.99, vol. 1548, p.109, Aleppo, vol. 615, p. 82.
- 16 Abdul-Karim Rafeq, "Arabism, Society, and Economy, 1918-1920," Yusuf M. Choueiri編 *State and Society in Syria and Lebanon* (Exeter: University of Exeter Press, 1993), pp.1-26, see pp.4-5.
- 17 Sati' al-Husri, *The Day of Maysalun*, アラビア語 (*Yawm Maysalun*) 訳 Sidney Glazer, Washington, 1966, p.113; Yusuf al-Hakim, *Suriyya wa'l-'Ahd al-Faysali* (Bairut: Dar al-Nahar, 1980), p.74.
- 18 al-Hakim, p.74; Khairieh Qasmieh, *al-Hukuma al-'Arabiyya fi Dimashq bayna 1918 wa 1920*, Cairo, 1971, pp.64-5.
- 19 al-Hakim, pp.87-8, 104.
- 20 Ibid., pp.56-8; Hasan al-Hakim, *Khuburati fi'l-Hukm*, Amman, 1978, pp. 46-7.
- 21 誓約の本文については、al-Hakim, p. 143を参照。
- 22 1920年3月13日付の電信で、American Consul in Aleppoが本国に報告。National Archives (Washington, DC), 国務省記録 (マイクロフィルム)、M722, roll 10, dispatch no. 478.
- 23 Ibid.
- 24 ファイサルを国王とするダマスカスのアラブ政府についての詳細は、al-Hakim, Qasmieh and Rafeq がすでにとりあげている様々な論文を参照のこと。また、他にも、次のものを参照のこと: Mary Almaz Shahristan, *al-Mu'tamar al-Suri al-'Am, 1919-1920* (Beirut: Dar Amwaj, 2000); James L. Gelvin, *Divided Loyalties: Nationalism and Mass Politics in Syria at the Close of empire* (California: California University Press, 1998); Abdul-Karim Rafeq, "Gesellschaft, Wirtschaft und Politische Macht in Syrien 1918-1925," (translated from English), *Der Nahe Osten in der Zwischenkriegszeit, 1919-1939*, Linda Schilcher・Claus Scharf共編 (Stuttgart: Franz Steiner Verlag, 1989), pp.440-81.

【Abstract】

Kingship, Caliphate or Sultanate: Why Syria Chose Kingship in 1920?

Abdul-Karim RAFAQ

College of William and Mary

After a brief survey of the institutions of the kingship, the sultanate and the caliphate, my paper examines the reasons that made the members of the Syrian General Congress choose Faysal, son of Sharif Husayn of Hijaz, king of Syria on 8 March 1920. Why was he not chosen sultan or caliph? Who held or coveted these titles at the time? What was the political culture in Syria that made the members of the Congress prefer a monarchy?

The composition of the Syrian General Congress that included Muslims, Christians and Jews representing the various regions of geographical Syria (Bilad al-Sham) was no doubt the determining factor for choosing a non-religious title for the head of state. Arabism was at its peak at the time and a secular title approved by all the communities seemed appropriate.

There was an ongoing public debate among Muslim scholars about the merits of having an

Arab caliphate. Sharif Husayn, the King of Hijaz, put himself up for the title of caliph encouraged by British promises to support him in this endeavor should he rise in revolt against the Tutks. He, however, did not obtain this title even though he rose in revolt against the Turks on 10 June 1916. When Mustafa Kemal Atatürk, the creator of modern Turkey, abolished the Ottoman caliphate in 1924, Sharif Husayn immediately declared himself caliph. ‘Abd al-‘Aziz Ibn Saud, Sultan of Najd and the dominant figure in Arabia, used this declaration as a pretext to attack Sharif Husayn and occupy Hijaz including the two holy cities of Mecca and Medina.. Ibn Saud eventually declared himself king of Saudi Arabia, but not caliph or sultan.

Although the rule of King Faysal in Syria did not last for more than a few months, the choosing of a monarchy rather than a caliphate or a sultanate by the Syrians is significant. It reflects the domination of secularism among the Syrians regardless of their religious affiliations. During his rule in Syria, King Faysal called for tolerance and cooperation among the religious communities and has proven himself to be deserving of the title of king for all the Syrians.